

## スペイン語圏を知る本（その64）

フロレンティーノ・ロダオ 著、深澤安博 訳者代表、八嶋由香利 [ほか] 訳

## 『フランコと大日本帝国』

（晶文社 2012年）

評者 安田 圭史

20世紀のスペインを36年に渡って統治したフランシスコ・フランコ將軍の独裁（1939年～1975年）の終焉から35年以上が経過する。36年という長期間の政権は、政府に反抗する人々への弾圧や検閲などを通して、当時のスペインに計り知れない影響をもたらし、現在でもフランコは多くのスペイン人にとって、まさに忘れられない人物である。従って、フランコはスペイン社会において、人々の意識の中にあっても軽々しく触れることができない、いわば「離れた」存在となった。そのため、35年という年月は、この「独裁者」と政権期に関する研究が進展していることを必ずしも意味せず、研究書も未だに多くないという現状がある。こうした側面から、2002年、第二次世界大戦中のフランコ政権と日本の関係を明らかにする本書が登場したことがいかに画期的であったかが分かる。日本でもフランコ政権の研究書は数少なく、この度、原書が世に出てから10年を経て待望の翻訳版が上梓された。

1939年の第二次世界大戦勃発当初、日本はヒトラー政権下のドイツとムッソリーニ率いるイタリアと枢軸国を形成していた。一方、スペイン内戦（1936年～1939年）においてドイツとイタリアに軍事援助を受け、戦争に勝利したフランコが指揮するスペインも、当時枢軸国に共感を抱くようになっていた。スペインと日本間の相互の関心は、そうした状況の中で生まれた。著者は、表面的なものであったものの、スペインではプロパガンダとして日本の軍事的勝利への称賛と武士道が何度も言及され、日本ではスペインの武勇と騎士道精神が盛んに強調された」と指摘している。

ただ、このような共感がスペインの枢軸国入りと第二次世界大戦参戦に決定的に拍車をかけることはなく、フランコ政権の外交は極めて慎重な姿勢を取るに至った。そのことを象徴しているのが、当時の在東京スペイン公使であったサンティアゴ・メンデス・デ・ビーゴの報告である。メンデス・デ・ビーゴは、第二共和制期の1932年からフランコ政権初期の1943年にか

て東京に長期在住し、日本で幅広い人脈を持っていたことから、元外交官で、首相、外相も歴任した広田弘毅とも親しい関係にあったとされる。メンデス・デ・ビーゴは、そのようにして得た情報と経験に基づいて、スペインが枢軸国側に接近することが危険であると自国政府に頻繁に主張した。

枢軸国側に近づき過ぎないというフランコ政権の判断は、スペインにとって正しい方向に作用した。枢軸国が第二次世界大戦で次第に不利な立場に置かれ始めたからである。その状況の中、スペインは日本に対してそれ以前とは全く異なる姿勢を取り始めた。フランコ政権の外交は、日本とは距離を置き、戦争を優位に進めていたアメリカ合衆国を中心とする連合国寄りに展開された。結果的にフランコ政権は、1945年4月に日本と国交を断絶した。スペインにおける日本に対するイメージも豹変し、「日本の敗北が望まれる」までになったという。

第二次世界大戦において、スペインは、枢軸国側だけでなく、連合国側にも秋波を送ったものの、最終的には「中立」を貫き、一方日本は1945年8月に敗戦した。スペインを参戦させなかったフランコの決断は功を奏し、フランコは独裁政権をより強固なものとしていった。総じて、本書からは、地理的にはお互い「遠い」位置にある両国が、第二次世界大戦中に交わされた数々の外交戦やプロパガンダを通して、一定期間であるにせよ、距離の「近さ」を実感したことが理解できる。著者は、スペインと日本が「近づいた」意外な事実を詳述することによって、多くのスペイン人にとって「離れた」存在である独裁者とその政権期の外交に見事に光を当てている。両国で進展が期待されるフランコ政権研究において、本書が果たす役割は決して少なくないであろう。

やすだ けいし

（龍谷大学経済学部専任講師・スペイン現代史、  
イスパニア語学科2000年度卒業）